
忘れないで...

莎月 双樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れないで…

【Nコード】

N4697P

【作者名】

莎月 双樹

【あらすじ】

世界に拒まれ存在が薄くなる奇病にかかった彼女を助けるために、別の世界に逃がそうとする彼。本当は行きたくないけれど、自分を助けようと懸命な彼のために頷く彼女。愛する相手に「忘れないで」と願う。

(前書き)

全体的に切ない作品です。

もしかしたら同じような話を書かれている方もいらっしゃるかもしれませんが。

ぼくの彼女が病気になった。
存在が薄くなる奇病だ。

最初はそれと気づかぬ程度。
今でははっきりと分かる程に。

症状が進むにつれて、周囲の人々は彼女を忘れるようになってきた。

最初は通りがかる人が彼女を認識できずよくぶつかる程度。
今では、ともすれば彼女の家族ですら彼女を存在しない者として
振舞う程に。

彼女の姿は薄くなり、時に揺らぎ　そのまま消えてしまうので
はないかと怖くなる。

…いいや、このままでは確実に消えてしまう、消されてしまう
それは直感。

彼女は何故かこの世界に嫌われ、拒絶されてしまったのだ　そ
れは確信。

だからぼくは、彼女が完全に消えてしまう前に彼女を別の世界に
逃がすことにした。

「原因を見つけて、必ず迎えに行くから」
ぼくの言葉に涙をぼろぼろと流しながら、嫌だというように首を
振る彼女。その涙さえも世界に留まることを許されないのがとても

痛ましく……何より愛おしかった。

陽炎のような揺らめきになってしまった彼女をそっと抱きしめ
もう触れることはできないから輪郭に沿って腕を回すだけなのだ
けれど 「愛している」と耳元に囁く。

愛おしい愛おしい愛おしい、ぼくの彼女。

他の誰が君のことを忘れてしまっても、僕は君を忘れないから。
必ず原因を突き止めて、治す方法を見つけて迎えに行くから。

涙をこぼしながら懸命に笑みを浮かべる彼女がいじらしくて、も
う一度抱きしめる。

離れたくない。

離したくない。

けれど、このまま君が消えてしまうことだけは絶対に許せないか
ら。だから

「ぼくを忘れないで。待っていて……」

* * * * *

私は病気に罹った。

存在が薄くなる奇病に。

最初は自分でも気づかない程度。
時々自分の手が透け視界がぶれ、
今では常に体が透けてしまう程に。

症状が進むにつれて、皆は私の存在を忘れるようになってきた。

最初は路を歩いていて通りがかりの人とよくぶつかってしまっ程度。

そのうち友人たちに話しかけた時に見知らぬ他人を見る目で見た後にハツと思いついては謝られ、

……今では、両親や姉弟ですら私がもともと存在しなかったかのように振舞うことが多くなった。

私の姿は薄くなり、時に揺らぎ　きつとこのまま消えてしまうのだろう。

……いいや、消えるのではなく、消されてしまうのだ　それは直感。

自分がこの世界に嫌われ、拒絶されてしまったから　それは確信。

家族が私のことを、うっかり、忘れてしまうことが増えたとき、優しい私の彼は私を別の世界に逃がすことに決めた。

その時はまだ触れることのできた私の体を強く抱きしめ、いつも私を優しく見つめてくれたその瞳に涙を浮かべながら。

君を愛している。誰よりも愛している。だから消えて欲しくない。君を忘れてしまいたくないのだと。

いつも優しく甘く囁いてくれたその声に珍しく激しいモノを滲ませて、彼はそう言った。

誰より愛している彼を。

誰より私を憶えてくれている彼を。

悲しませたくなくて、私は頷く。

「原因を見つけて、必ず迎えに行くから」

彼の言葉に涙がぼろぼろとこぼれる。

本当は行きたくない。最後まであなたの傍に居たい。 想いばかり胸にたまり、でも彼を困らせたくなって言葉にはできない。

今や私の体は陽炎のような揺らめきとなってしまった。 そんな私を抱きしめてくれる、優しい優しい、愛しい彼。

「愛している」と耳元に囁くその声も、すこし涙ぐんだ綺麗な瞳も、何もかもが愛おしくてたまらない。

綺麗で優しい、私の彼。

「ぼくを忘れないで。待っていて……」

囁く声に込められた切なさに、私の胸は張り裂けそうになる。

愛しい愛しい、綺麗で優しい、大切なあなた。

あなたを傷つけたくなって。

あなたがこれ以上悲しむのを見たくなくて。

だから私は言えない。

私は、あなたを愛した世界に拒まれたのだと。

あなたが私を愛したから、嫉妬した世界に弾かれるのだと。

だから。

だからどうか。

「私を忘れないで……」

あなたを愛した、あなたが愛してくれた私が消えてしまうことを。

怖くて怖くてたまらない。

私が居なくなったら後もあなたが私を憶えていてくれるのかわからないから。

私の前にも、誰かあなたが愛していた人がいたのかもしれないから。

私がもしかしたら、ことうやっつて消えた一人目ではないかもしれな
いから。

やさしいあなた。

愛しいあなた。

どうかお願い。

これ以上悲しまないで。

私の他に愛さないで。

・・・他の誰も消さないで。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

だから。

だからどうか。

忘れないで……

(後書き)

‘彼女’の不安は不安で終わるのか現実になるのか……。

いつもの電車に乗り遅れ「ひよっとしたら間に合わないかも」という焦りの中から飛び出した話です。

そんな状況下で浮かんだ話なので、ハッピーエンド至上主義の作者にしては珍しく切ないというか悲観的というかな雰囲気になっています。

投稿しようか迷いましたが、「こんな話が好きな読者もいるかもよ」という友人の言葉に後押しされ投稿することにしました。

最期まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4697p/>

忘れないで...

2010年12月13日03時36分発行